

つくしだよりから

「あけましておめでとー!」

とはいっても「二〇一七年」のことではありません。実は教会の暦はひと足早くクリスマスに「あける」。イエスさまによる希望と喜びの一年が始まったから、「あけましておめでとー!」。

クリスマスといえば、二〇一六年つくしのページェントを初観賞しました。台詞が自分の言葉になり、心から楽しんで演じていた。合唱もしっかりと劇を支える歌声だった。クリスマスはつくしの子にとって、とても大切な日なのだなあと、実感できました。お祝い会后、降園する皆を正門で見送っていると、年長さんの一人が先程いただいたプレゼントを手近づいてきました。

「ねえ、つださん、このプレゼント、サンタさんはどこに置いてくれたの?」

「たしか、あの階段の上の方…」と答えると、

彼女は再び門を入って階段をかけたのぼり踊り場でしばらく上から下をのぞいたり、左右を確認。「もういないな。こんど会えたらいいな」。

そういつて手をふり、帰っていきました。

「心の中に、ひとたびサンタクロースを住ませた子は、心の中にサンタクロースを収容する空間を作り上げている。サンタクロースその人は、いつかその子の心の外へ出ていつてしまおうだろう。だが、サンタクロースがいた、その空間は心の中に残る。この空間、この収容能力、つまり目に見えないものを信じるといふ心の動きが人間の精神生活のあらゆる面でどんなに大事か。のちに一番崇高なものを宿す心の場所は、このようにして幼い日に作られるのだ。」

『サンタクロースの部屋』松岡享子著

満足そうに家路につく子たちを見送りながら「なんてまっすぐ心が育っているんだろう」と心暖かくなった二〇一六年クリスマス、でした。

（二〇一七年一月つくしだより、津田記す）